

## [座談会] 大学図書館夢がたり

著者	山野 博史, 阿蘇 さやか, 市原 亜希子, 土師 直美, 濱生 快彦, 藤野 雅士
雑誌名	関西大学図書館フォーラム = Kansai University Library forum
巻	3
ページ	61-70
発行年	1997-05-29
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00022165">http://hdl.handle.net/10112/00022165</a>

## 大学図書館夢がたり

本が書架を歩みだし、マルチメディアが助け船を送りこみ、人が学びとる毎日。そんな大学図書館の最前線で、自分にきびしく他人にやさしく、誠実に仕事に励む若手図書館員男女五人が、心に思うまを語りあう。

明るく陽気に、ちょっぴり辛辣に、苦あれば楽あり、大学図書館ぐらしの哀歓をまっすぐに伝えるたのしき語らいのはじまりはじまり。  
(図書館長 山野博史)

### 本の倉とのめぐりあい

山野 自分自身が図書室や図書館というものに利用者の立場でめぐりあってどんな経験をしてきたのか。いまの仕事につく前の話を聞かせてください。

土師 私は、小学校、中学校、高校のとき、自分の学校にある図書室をあまり利用しないほうでした。小学校のとき、一時的に、毎日1冊ずつ読むのがはやっていて、実行していた記憶があるのですが、印象に残っていることも少ないですし、どちらかというように利用していなかったほうです。

大学に入ってから、関西大学の図書館はいつも快適だし、大学では、それまでの教室のような居場所がないので、空き時間も自習のときも、図書館にしょっちゅう来てました。

ただ、図書館はまじめな本を探す場所だとずっと思っていました。勉強のための参考図書とか、読書感想文などの宿題が出たときの課題図書とか、そういうちゃんとした本を探すところだときめつけていたふしがあります。友だちが話題になっている本を公共図書館で借りてどんどん読んでるのがわかって、娯楽というか、たのしみのための本もいっぱい借りて読んでもいいんだというあたりまえのことに、その友だちが気づかせてくれました。

働くようになってからは、どんなものであれ、それを読んで賢くなるかどうかはわからないのですけれども、いつも本をたのしく読むようにしています。山野 心中ひそかに想いを寄せている女の子が読書家で、いつも図書室にいたので、自分も足しげく通うようになった。そんな図書館でしか起こらないようないい思い出はないですか。よく利用した、しないにかかわらず、だれにでも大切な図書館物語のようなものがあると思うんですが、どうですか。

濱生 そんな美しい話はありませんけどね。図書館

に一生懸命通っていたのは小学校のときと大学生の時なんです。小学校の時はたんに本が好きというのか、いうのも恥ずかしいのですが、野口英世とか読んでしまうじゃないですか。

山野 偉人伝のシリーズね。なつかしいなあ。

濱生 親が20冊とか40冊とかのセットを買ってくれたのですが、それも読んでしまったので、図書館に通うようになったのです。北九州市の田舎でしたので、街までかなり遠くて、バス賃は小遣いから出すんですけど、片道歩いたら倍行けるじゃないですか。それで、行き片道をいつも1時間くらいかけて歩いて、帰りはバスで帰ってという通い方をしていたのです。

おもしろい話というか、通っていてうれしかったのは、いまの図書館員の人はたぶんそういうことをいわないと思いますけど、小さな田舎の図書館では、借りようとした本を、「これはいい本だ」といってくれたりしたのです。「これはいい本だよ」とか、「むずかしい本を読んでいるね」と話しかけられると、気分がよかったですね。

市原 私にもこれといって美しい思い出はありません。そもそも私は国語というものが大嫌いだったのです。ということは読書も嫌いだったような気がするんですけど、いま思い起こすとやはり小学校の図書室がいちばん思い出深く、心からたのしめる場だったですね。小、中学校時代、私が行っていた学校では、道徳の時間がありました。その時間、絶対に月2回は読書の時間ときまっていた、図書室に本が嫌いな子も好きな子もみんな行かされるんですね。それで、どんな本を読んでもかまわない、なにをしてもかまわないといわれると、なぜか国語が大嫌いな子でも本を読んでいるんですね。自分自身も国語の時間にくら読んでも頭に入らないものが、図書室では、自分が気になる題名のを開くだけで、

すうっと内容がのみこめて、それなりに感動していたという覚えがあります。

中学校でもそんな感じで、読書というか、本が並んでいる雰囲気が大好きだったですね。いまでもそれはつづいてまして、むずかしい本を読むのはやっぱり嫌いなんですけど、本屋さんに本がずらりとある雰囲気が好きでつい立ち寄ってしまったりします。

高校になると、自分がたのしみたかった図書室というイメージからは遠ざかってしまって、高校時代なんて恥ずかしながら、私は1、2回しか立ち寄らずじまいで、それもただ勉強する場になってしまっていたのです。

大学に入りますと、一気に図書室から図書館に変わって一つの建物になってしまったので、その本の多さにびっくりして、そういう雰囲気は好きだったんですけど、就職するまで請求カードで書庫の本を依頼することも知らなかったのです。実際、大学の図書館はそれほど居心地がいい場所だというふうには思いませんでした。質問がしにくい窓口という印象があって、聞きたいことがいっぱいあったのですが、こわくて聞けない。

山野 その気おくれするというのはなにが理由だったと思いますか。

市原 本に対する知識もなければ、文献を探すことでもまったく素人だったですからね。いちから教え

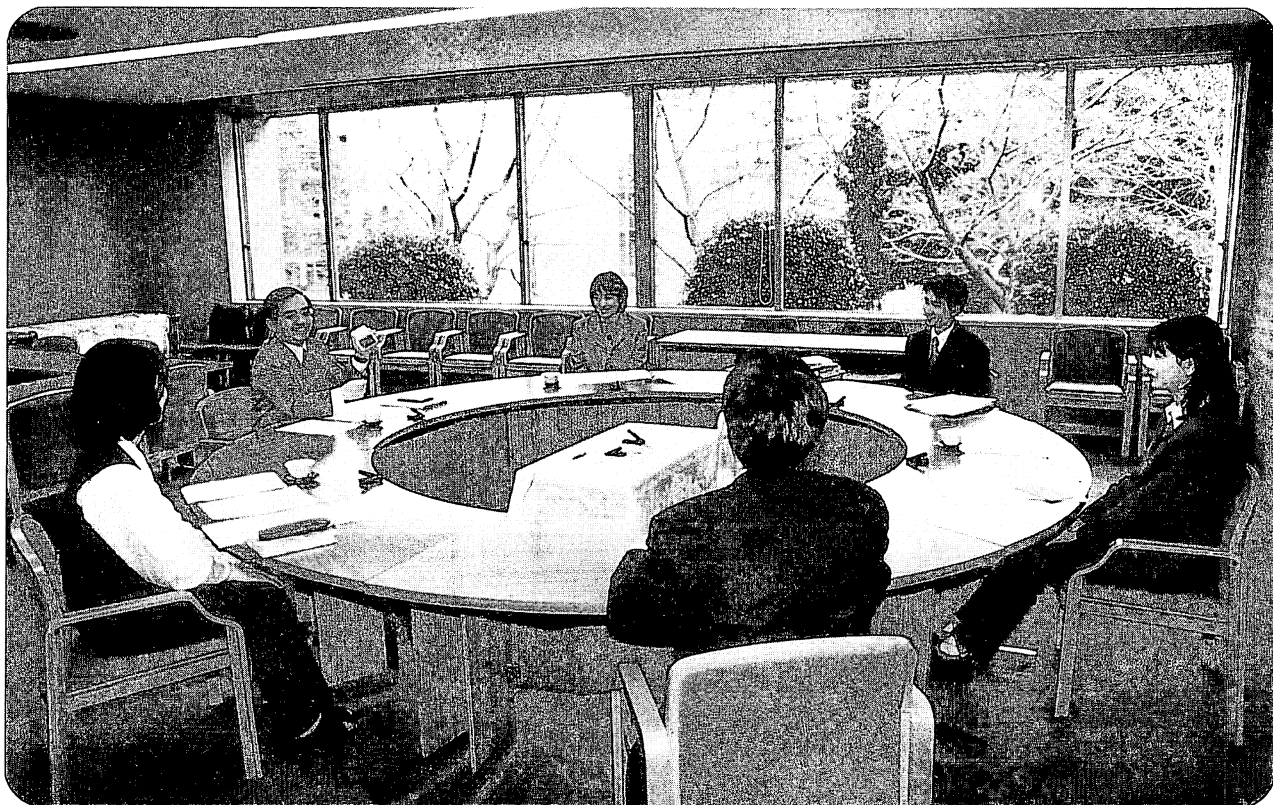
てもらわないとできないタイプだったんで、つい人に頼ってしまうのです。それだけに窓口に行って、なにがわからないかもいえない。口ごもりながら単語を並べて、こういうことがしたいと一生懸命なのですが、運が悪かったのでしょうか、窓口の方が「なにが聞きたいの」という感じでこわかったんですね。それ以来、質問の仕方をまずこっちで練習してから窓口に行かないといけないような妄想にかられて、結局、もうそんな面倒くさいことは嫌だというふうになってしまった感じです。

山野 それは、やがて後に今度は自分が仕事をする側に立ったときに、ひょっとしたら、そういうふうに思っている学生さんがいるんじゃないかという思いやりにつながるのじゃないでしょうか。

本について情報を提供したり、知識を紹介したりすることは、へたをすると、すごく恩きせがましくなるんですね。自分が知っていることを主張がちで、教えてあげているという気がどこかあるから、相手がどぎまぎしていても、おかまいなしで自分の思惑を押しつけてしまうことになる。

市原さんの話には素朴に本を見たい、借りたいと思っている人のおっかなびっくりの気持ちがよく出ていたように思いますね。

藤野 小学校のときには、グループ発表とかで地理や歴史を調べるのにみんなで図書室に行ったことく



らいで、どんなふうに出借や返却をやっていたかは忘れてしまっていますね。

中学校に入って、読書の時間というのが毎週1時間国語の授業に入っていて、図書室に必ず行かなければなりません。毎週1冊読んで読書感想文を提出しなくてはならなかった。読んだ内容というのは全然覚えていないのですが、書きなければならないという使命感みたいなものだけは記憶しています。高校に入ってから、新聞とか雑誌を見に行く程度で、あとは深い読書はしていませんでしたね。

大学に入っても同じように、あまりよき利用者ではなく、法学部だったのに判例集とかをじかに手にとって読むということもしませんでした。夏休みの前になると、レポートを提出するためにいろいろ本を借りたかなという感じです。

阿蘇 私もそんなに自分でいられるほど、まじめな読書家でもなんでもないのですが、いまになって思うと、図書館との出会いやその思い出よりも、まず自分のまわりに本が好きの人がいっぱいいたと思うんですよ。私の母は本を読むことが好きで、説教するわけじゃないですけど、自然といいことだと教えてくれた。若い夫婦で、母は専業主婦で父は安月給で、豊かなはずはないのだけれども、小さい頃、立派な絵本のセットを思いきって買ってくれたり、定期購読で毎月本が届きますというような、きついま思ったら結構な値段がすると思うんですけど、そんなのに申しこんでくれたりしました。そういう本はいまでも残ってあって、これまで大掃除するたびに捨てようかと母と話すこともあるのですが、母は孫が来るまで捨てないで置くというのですよ。よだれなどでべたべたになった絵本を後生大事にしまってあるんです。それやこれやを教えてもらったのが、本を好きになるきっかけだったかなと思います。

それから、私には兄がいるのですけれども、その兄も本が好きで、高校時代、クラブ活動だったのか、家にまで目録カードを持って帰ってきて書いているんです。母は兄にテスト前に勉強しなさいとせきたてるのに、兄は読みたい本があるから隠れて読むのです。それを見つくと、母が怒って、本が投げられたり、破られたりして、激しいやりあいになるのを見ていました。

こうやって図書館で働くようになって、いまカウンターにいるんですけど、自分が学生だったとき、そんなにまじめに図書館を利用してなかったの、「図書館を利用している人がたくさんいるんだな」、

「まじめに勉強している人が多いんだな」と驚く毎日です。私は、資料探しのお手伝いをする仕事をしていますけど、私にはその価値は分からなくても、その人にとってはすごい価値のあるものだというのが感じられて、「あっ、自分の兄みたいな人がいっぱいいる」というふうに感心しています。



阿蘇さやか

す。そのような本が好きの人を応援できる仕事につけたのは、自分で努力してめざしてやってきたのじゃないのだけれども、幸運だなと思っています。

#### 新米図書館員奮戦す

山野 みなさん、これといった読書体験も図書館体験もありませんと控えめですが、ただ、気がつけば本があって、文字を知っていて、図書館へ通おうと思えば通うことができるという環境で、全体として今日まで過ごして来たこと自体、素晴らしいですね。大きな歴史の海のなかにその話を置いてみるとすごいなという気がします。

大学図書館で仕事をするようになってから、いいことであれ困ったことであれ、とっておきの話があれば聞かせてもらえませんか。

濱生 入ったときに、まず戸惑った話をしますと、いまは本の支払い処理を担当しているのですが、1年目は整理の仕事をしていました。3日目から、いきなり分類をするようにいわれて、やりながら後で先輩にチェックしてもらって覚えていきなさいというふうな研修のやり方だったんですね。私は社会学部出身だし、別に外国語が得意なわけでもないんです。小さな話になるのですが、もし、チェックがわからなかったら、この本は私がなんとかと名前をつけたら、ずうっとそのままなんだと思うと、それはすごいことじゃないかとこわくなったことがあります。だから、一冊の本にとっても神経を使いました。しかも、理科系の本とかになったらえらいことなんです。これをなんとか科学に入れるか、なんとかか力学に入れるかで半日、土木辞典を引いてみたりして、苦労しました。図書館って基本的にいまあるものやむかしのものをずうっと置いておくところですよ。それに自分が判断したことが残っていくのは、

こわいなと痛感しました。

山野 探す人のためのナビゲーターの役割でしょう。羅針盤を狂わそうと思ったら簡単ですよ。だからこそ、きちんとやらなければいけないと考えるか、尻ごみしてしまい、この種の仕事は厄介だなとおびえて、マニュアルどおりに安全第一でおもしろいこともなんともないかたちで、ただ作業としてこなしてゆくのか。

自分の分類の仕方次第によっては、だれかが例えば50kmかかって行くところを100mでたどり着いてもらえるかもしれない、と。そういうことになるわけでしょう。逆に、自分では上手に作っている分類だと信じていたのに、探す人が下手にアプローチすることもありますよね。

電子メディアのなかに情報として納まってしまいうにせよ、書庫のなかで書物として出番を待っているにせよ、実は探している人からすると、全部湯気が立っているもので、その湯気の立ち方をきめているのが図書館員なんですね。

濱生 そうなんです。結局、いろんなところが電子化されていっても、やっている作業というのはわりかしアナログなんですよ。

山野 その基本を押さえていないと、その作業の部分に人間味のあるあたたかいものが流れていることがわかりにくくなってしまふかもしれない。

濱生 いまはもう分類する仕事から解放されたので、えらそうなことはいえませんが、支払いとかの仕事は後でどんどんチェックがかかりますからね。別の厄介さがあるとはいえ、そういう意味では楽になりました。それだけよけいに、最初入ったときの驚きはなまなましく残っているなという気がします。

山野 いまその業務を別の人ががしていても、その問題に関しては想像力が働くでしょう。

濱生 そういうことです。その想像力を忘れたくないですね。

土師 私は大学生になっても、相変わらずブラウジングというか、本棚に行って本を見つけることしかできなかつたんです。だけど、実際に働くようになってみると、メディアもふえて、いろんな方法で調べる人がいるので、「あっ、こんな調べ方もできたのか」と気づくようになったし、驚いたり感心したりすることがいくつもあります。

私、学生るとき、コンピュータを初めて触ったら、心臓がドキドキしたのですが、図書館の人にやさしく親切に教えてもらえて、うれしかったのです。

自分もいまサービスするようになって、そのときのように思ってもらえたらいいなという気持ちでやっています。それから、書庫ガイダンスというのを受けて、そのときはレファレンスカウンターにいる方が説明してくださったのですけ

ど、丁寧で、真剣にやっているのが伝わってきました。最初の年に、書庫ガイダンスの仕事をするようになって、うまくこなせているのか、不安でした。まるでバスガイドさんみたいに「これはこっちです」とか、

ただ棒読みしているだけみたいな感じでした。私、たまたま4年生のときに書庫に入ることになったのですが、あそこってすばらしいところです。入ったとたんには自分はえらく勉強したつもりでいましたし、椅子からなにか全部好きで、空調の効き方とかも、図書館全体がふんわりとしたぬくもりがあって、建物も含めてすべて大好きです。そのようなところで1日中暮らせるので、毎日が幸せです。

山野 利用者サービスやアドバイスするときに大事なものは、先輩の方がたから受けた恩恵が話に出ましたが、一つは本当に気持ちよく親切に仕事をしようとしているかどうか。もう一つは熱意をもって誠実に働いているかどうか。この二つに尽きますかね。

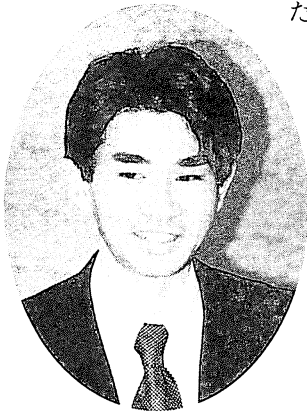
土師 そうですね。親身で熱心であること、それとえらそうじゃないことですね。

山野 親身になってくれてたら、上手でなくても許せるところがあるでしょう。それから、多少まちがっていても一生懸命だったら許せますよね。よどみなく話すけど、血が通ってないとね、ばかにされているような気がする場合もあるし、説明は正しいのだけれども、かたてまにやっているような感じで話されると、自分があしらわれているような印象を受けかねません。

藤野 いままで書庫の本とか貴重書とかを眺める機会がなかったのに、書庫の仕事で貴重資料の配架スキャンをする必要が生じて、1枚なん百万円という珍品に近づけるときがあります。閲覧の仕事では、そういう折や請求の際にしか見ることができません。でも、いろんな資料がこの図書館には揃っているの



土師直美



藤野 雅士

だと、学生のと看とは全然ちがった角度から知ることの連続です。それから、マイクロサーバーという機械を触らなくてはならなくなつて、そのマイクロサーバーは10年ぐらゐ経っているからか、時折ピーピーと音がして、利用者が通りかかると、なにが起つたのかというふうに見にく

るのですけれども、よく止まってしまう。それもまたたのし、でありますして、書庫に入つてマイクロフィルムってこんなにたくさんあるんだなと気づくたびに、この図書館の資料の重さにびっくりしています。

開架閲覧室とか1階の参考図書室しか知らなかったのに、図書館全体の資料を見わたせるようになってうれしいですね。

阿蘇 私は去年まで市原さんと同じ図書情報管理課にいたのですが、そうすると、学外から来たお客さんとか学生さんとかに図書館のなかを案内するような機会があります。とくにPTAのおばさんに受けるポイントというのがいくつかあるのです。それがカレント雑誌棚なんですね。新着雑誌が扉の前に立ててあり、ここに新着雑誌があります、1年以上古いものになりますと書庫にございますが、過去1年分はこちらにといつてガチャと開けて、最近1年分がそこに入っているのが見ると「あ〜っ」とお母さま方が感動されるというポイントが一つ。次にメインカウンターのところで、ここで書物の請求をしますが、どのようにして書庫の本がここまで届くかということですね。いちいち走つていたのでは体力が持たないからファクシミリで送信します。そうしたら地下に病院でよく見かける電車のようなのが走つていて本を運んでくれるんですと説明すると、もう1回「あ〜っ」とくる。普段は書庫の案内はしないのですけれども、ときに来客を書庫まで案内することがあると、やっぱり電動書架にびっくりします。ですから、働いている人間にとってはあたりまえのことでも、使いなれていない人には、図書館ってふしぎなところなんだなとうけとられるときがあります。

失敗談をひとつだけ。カウンターで、関西大学に

ない雑誌をある大学に見に行きたいとおっしゃる先生がいて、もう見に行く大学まできめていらつしたので、じゃあ、紹介状を書くだけだと思つてさらさらと紹介状を書いて「はい、どうぞ行ってらしてください」となつたんですが、後日来られて、行つたらその先生が見たい雑誌の巻号が欠号だつたといわれたのです。要は私が確認をしなかつたからなんです。目録をよく見れば、その大学のその雑誌が欠号であることはわかつたのに、きちんと見なかつたから、私はその先生の時間と電車賃とをむだにしましたのです。怒られたりはしなかつたのですけど、いまだにその先生の姿を見かけると思わずビクツとしてしまいます。

山野 先ほどの学外者を案内する話、少しおかしみを帯びた表現をされたけど、大事なことがそこにあるような気がします。書物の持っている魔力を物語っていますね。揃つてるとか、どっさりあるとか、に接して感動するということは、人間にはありますよ。それと一緒にもう一つは電動書架、私はジェットコースターと呼んでいるのですけれども、あれが走り回つたりする、つまり電子化の技術革新に素朴に、しかし、切実に感心するというのは戦後日本人の心の傾きと重なりあいますね。物量作戦に弱いのですよ。言葉をたくさん費やされたり、資料をいっぱい見せられたりすると、どなたもかしこまってしまうでしょう。それから、これだけ技術が進んでいるのですよといつての見せつけられると、圧倒されてしまうのね。それを目標にして戦後の日本人はひた走つてきたようなところがあるじゃないですか。中身の濃い仕事をしないとといけませんよとか、技術の支えがないとわれわれはなにもできないですよみたいなね。ところが、幸か不幸か、そのような精神のありようが曲がり角に来はじめている時期にみなさん方は図書館で仕事をし、生活者としても将来への見通しを持たなければいけないところにさしかかつていて、意外とおもしろい時期に大学図書館で働いているのじゃないかな。

人とやりとりするかたちの業務を中心にすえて、図書情報管理課で仕事をしている市原さん、そのあたりはどうですか。

市原 図書館業務からは離れてしまうのですが、大体、教員の方がたのお相手をしています。人によって対応の仕方を微妙に変えないといつて関係が築けないと学んでいまに至っています。図書情報管理課というのは、受入れとか整理とかに苦勞している最

前戦の方を陰でバックアップするような、日頃はあまり外に出ない、地味な仕事をしないとイケないのですが、唯一、図書館案内のときだけは、自分が主役になったかのような仕事なんですね。

私も、就職して2カ月くらいしか経っていない新人のとき、PTAの女性の方たちを案内して、あがってしまい、失敗をくり返しました。お母さま方の「この人、まだ慣れてないみたい」のヒソヒソ声を耳にして、はたと気づいたのです。図書館員だからといって、なんでも知っているわけじゃないし、ドキドキする気持ちも同じですから、その辺を隠さないようにして、私だって日々勉強なんですという感じになってみると、これまでは上からものをいいがちだったのを反省する機会がえられて、すなおにお話できるようになったので、かえって自分自身興味のあることを新たに発見して、うまく伝えられるようになった気がします。

もう一つの失敗は、ロータリークラブのお偉方を案内したときです。男性ばかりで「でございます」とよそ行きの調子でしゃべらないとイケなかったのですが、「これで私の説明を終わらせていただきます。ありがとうございます」といった後に、ツカツカと男性の方が寄ってこられて、「質問があるんだけど」といわれまして、なんの質問かなと思って構えていたんですね。ところがちんぷんかんぷんだったのです。質問したのは若い人で、知ったかぶりをするいとまもなかったのですが、いじわるせずに、やんわりと救いの手をさしのべてくれたため、事なきをえました。そこで、正直にわからないことはわからない、きっちり勉強しておきますという一言を告げさえすれば、本当にいい関係が築けると痛切に学びました。

万事、上からものを与えるという気持ちではつとまらないのだなと、いまもいろんな失敗を重ねながら、実感しています。

山野 図書館という物学びの殿堂でくらすことによって、自分が謙虚に働いているつもりでも、どこかでいろんなことを知っている人間であるかのような錯覚に陥りやすいのです。それは教員であれ、職員であれ、学生さんですらそうだと思うんですね。別におごりたかぶるという意味じゃなくて。大学図書館で仕事をしたり、利用したりしている人間が心しなければならぬのは、自分は知らないことがたくさんあるんだということです。これから学ばなければいけない、人に教えを求めなければいけないこ

とは、いくらでもあるんだ。だからといって、めげてしまうのではなくて、それをおもしろがってうけとめるようにすると気が楽になるはずですよ。いつも、あっ、まだまだつかめてないな、知り尽くしてないな、もっと知りたいなと思う気持ちを大切に利用者の方と接するとずいぶん心が安らぐにちがいない。

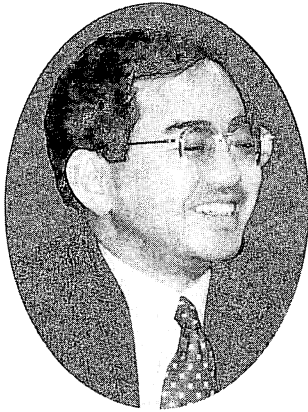
本を読んでいますか

山野 私も含めてですが、利用者の要望がどうのこうのとえらそうなことをいったり、関西大学総合図書館は質量ともに充実していると誇らしげにいったりするけれども、おのれの読書生活を棚上げにしてしゃべっているのではないかと問いつめられると、ちょっと口ごもってしまいますよね。じゃあ、仕事のうえだけで本とつきあっているのか。生まれてこのかた、関西大学総合図書館で仕事をしているいまが最高に読書生活も充実していると、恰好のよいことをいえるのかどうか。

阿蘇 本を読まなきゃ読まなきゃという意識はいつもあるので、常に図書館の本を借りているのですが、5割くらいは全部読まないうちに返却日が来てしまい、あ〜あとと思いながら返して、また借り直す始末です。いまの読書生活は、2本柱みたいになっていて、一つは仕事のための読書、興味がないけど丸飲みで読む。もう一つは自分の趣味の読書。でも、その境目ってきっちりわかれていなくて、趣味の読書で読んだことをたまたま利用者に聞かれて役立ったりすると、やったねという気がして、とびあがりたいたい気分になります。だから、近頃はどっちときめず食欲に読書するようにしています。

図書館員だから読まなければいけない本というのはなくて、図書館員には、遊び心みたいなものが必要で、そういう人がふえるときっていい図書館。図書館員なんだけれども、話をしていると、文学者みたいだったり、経済学者みたいだったりする人がいる図書館が魅力的な図書館じゃないかなと思います。山野 大学図書館で働いている方に共通するはずなんです、その気になったらいつでも万卷の書物にありつけるというぜいたくな立場にある。その自覚をたえず忘れていないかどうか。別のいい方をすれば、膨大な書物や資料に囲まれているためか、元来自分は本が好きだったんだけど、こんなにたくさんでは食傷気味だと読書欲が減退していないか。このぜいたくさを自分のものにしない手はないと、ますます欲ばりになっているかどうか。

それとね、図書館でいつでも本を借りだせることで読書生活は豊かになっているのだけど、自分が身銭を切って本を買う機会が少なくなっていますか。



山野 博史

自分が持っておきたいから、人にプレゼントしたいからといって、本を買っていますか。読めさえすればいいんだというほうに傾いているのか。いや、それとこれとは別で、借りる本は多くなって、それはそれでうれしいのだけど、買うこと自体のエネルギーも増大する一方である、

となっていますか。

藤野 むずかしくて長い時間がかかって読み切れそうになかったら、そういう本は買いますけれども、文庫や新書であれば、それほど時間もかからないし、電車のなかでもすぐ読めますから、その種ものは図書館で借りますが、読みごたえのある本は買って手許に置いておきたいなと思います。

山野 文庫や新書こそ値段が安いからとにかく買っておこうという気にはならないですか。図書館で借りますか。

藤野 文庫、新書を買えばいいことが多いので、網羅的に揃っている図書館は、そんなとき、ありがたいです。

土師 小さい頃から、親に本を読むのは大事だと教えられてきたにもかかわらず、そんなに読書しなかったの、いまその遅れを取りもどしている最中です。なんといっても無料で読めるんですもの。でも、ほとんど本は買わなくなりました。

私はすごいミーハーでして、みんなが読んでいる本、売れている本を私も読んでみたい、おもしろくてもはずれでも。図書館の本だったら、はずれでもいいわけなんですよ。いけないなと思うんですが、いつもまっさきに借りるんですよ。それが私の仕事の醍醐味だわ、と。ただ、書きこみをした本や、図書館で借りて読んだ結果、これはいつまでも持っておきたいと思う本は買いますが、冊数は少ないです。それから旅行に文庫をなん冊か持って行きたいときは買います。

山野 読んだ本の一覧みたいなものをパソコンに入れたりしているのですか。

土師 パソコンには入れてませんが、冊数がふえてうれしくなってくると、手帳のうしろに日にちと書名と著者名を書きためて、うん、これも読んだなと眺めながら、ひとり悦に入っているのです。

市原 図書館で仕事をするようになってから、節操がなくなってしまって、ジャンルを問わない読書、医学もあれば、建築もあり、文学もあるという、いままでの私には考えられなかったような読書生活を送っています。土師さんがまめに読書メモを作っていると聞いて見習わなければと思ったんですが、読みちらかす代わりにタイトルも覚えてなかったりするのです。「この間、とてもいい本を読んでね」「なんという題なの」と聞かれて、「さあ」というしかなくて、しょんぼりなんですけれども、読書量は本当に多くなりました。

それから、本を購入するかしないかですが、やはり自分で持っておくのがたのしみな本ってあるんですよ。とくに表紙がきれいなエッセイとか。それに、落ちこんだときに手に取って大切なページだけを見たい場合もあります。



市原 亜希子

濱生 買うか買わないかについていいますと、私は所有欲がつよいというか、本を買いたい人なんです。図書館の本というのは、基本的には最後まで読まないですね。最後まで読む本は必ず買ってしまいます。図書館の本は読む本ではないというか、あってくれればいいし、なにか見たいなというときに、そこにあればいいんであります。

山野 むしろいちばん後回しにできる本という感じがあるでしょう。

濱生 そういふところがありますし、図書館にあるかなと思って調べて、なかったらうれしくて買ってしまったりするんですよ。どうして買うかという、本が少しずつたまっていくとなんとなく自分だけの人生記録ができあがってくるみたいじゃないですか。私自身にとってしか意味はないのだけど、なんでこの本を買ったんだろうとふしぎな感じのする本が混じっていたりして、おもしろいんですよ。

山野 大げさな方になるかもしれませんが、関西大学総合図書館は、毎日の仕事とはいえ、思いや



りこめて努力を惜しまずひたすら精励する人びとが支える大学図書館だと信じて疑いません。その気持ちを一人ひとりが持っているとしてつもなく大きなエネルギーになるのです。ちょっと聞いていただいてもなかなかわけありの読書生活をしているようで、たぶんここに同席していない人たちだって、一癖も二癖もある読書人生を大事にしているにちがひありません。

もうちょっと智慧をしばりたいとか、現在の図書館のシステムではこういうふうになっているけれども、こんなアイデアもいかせたらいいのになとか、自分の部署と関係なく、聞きたいですね。図書館の職員の持ち味は、サービス提供者であると同時に利用者の立場も享受できることですね。実現の可能性のあるなしは別にして、どうですか。

#### ひとしずくの智慧から

土師 最近ようやく、いろんな角度で本を探すよこびに気づき始めたところです。この書名の本はどこにあるか、はやく教えてくれという人よりも、これからもどしどし図書館を利用したいから、どんなふうにも資料を探したらいいかをきちんとたずねておこうとしてくれる人にめぐりあうとうれしいですね。私の知識もあやふやなんですけど、知っているなりに、そういうことを調べたいのであれば、新聞でも探せるし、雑誌記事でも引けるし、検索機に入れてみると、このあたりの場所だとわかるから、そんなふうにしても探せるんですよと一生懸命説明してきます。新しい発見をしたとって機嫌よく帰ってくださる方がいたら、すなおに気分がよくなります。実際には、そこまで行きつづくのにむずかしい点が多いので、そういうふうにはできたらいいな、どうしたらいいんだろうな、といつも考えているのですけれども、思い通りになることはめったにありません。でも、ひとりでも親切にしてもらったと感じてくれて、少しずつでもその印象が広がっていき、関西大学の図書館は使いやすいというイメージが定着していけばいいなと、たえず願っているのですけど。

山野 サービス提供者と利用者との間にいい意味での仲間意識、励ましあえる関係が育つとこわいものなしなんですけどね。いつまでも古びてはならない、すたれてはいけない関係だと思えますね。

市原 人への対応面でしか、いま、ものが見えていないのですが、私がこれからパイロットになるくらいむずかしいことと承知のうえでいえば、職員

を向上させるための研修として館内トレード体験学習みたいなことができたなら、と夢想しています。

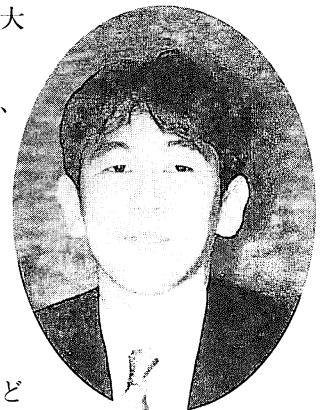
日頃絶対に正しいと思っていることが果たして本当に正しいかどうか、たしかめあう。職員同士のトレードだけでなく、利用者にもなってみるという試みはどうでしょう。薄っぺらなサービスしかしていないのではないかな。そんな反省がうまれたら、しめたものではないでしょうか。

阿蘇 私が強調したいのは、この図書館ってずいぶん実力があると思うんですよ。設備は素晴らしいし、建物も大きいし、本もたくさんある。でも置いておくだけじゃ意味がない。多くの人が使ってこそ価値があるなって。近くに住んでいる人にも気楽に使ってもらえる時代が来たらしいですね。実際問題、合意を達成しないといけないことだらけでしょうが、でも、無理だからと諦めてしまったら、諦めたことで絶対実現しないと思うんですね。これから、そういう問題はどうなっていくのだろうとよく考えます。

濱生 大学図書館は基本的には大学に所属している図書館ですね。だから、図書館員かと問われると、どちらかといえば大学職員として自己紹介するほうが多いでしょう。図書館はどうあるべきか、どういう方向に進まなくちゃならないのかということは、必ず、その大学がどういう方向をめざして歩んでいるのかと密接不可分ではないでしょうか。

公開の問題にしても、研究を重視したいと考えれば、公開は控えたいくなる。

でも、世の中に開かれた大学であろうとし、教育に力を入れようとするなら、いろんな人に生涯教育とかで勉強しに来てもらったほうがいいにきまっているから、公開するにこしたことはないです。大学がどういうビジョンを持っているか、どういう道を選ぶのか、知りたいですね。



濱生 快彦

山野 大学図書館は、大学の顔である、物理的にも精神的にも大学の中心であるといいながら、図書館の位置づけが本当に適切になされているのかどうか。このむずかしい時代にどっちに向かって前進すればいいのか。

私の見るところは、大学の図書館をどんなふう  
に充実してゆくかは、それぞれの大学の死命を制する  
問題になると思うんです。おたくの図書館、建物  
も立派だけど、中身も濃いですねとほめられたら、  
こどもがおりこうやねといわれたときみたいに、心  
うきたつものでしょう。濱生さんのことばをうけて  
私なりにいいますと、図書館長の職についているか  
らというのじゃなくて、一個の本好きという立場で、  
そして図書館というものに強い関心を寄せ、いつも  
利用している者の立場で申すならば、図書館の将来  
は、図書館自身がきめんといかんでしょうね。むろ  
ん、いろんな立場の人の意見に耳を傾けないといけ  
ませんが、待ちの姿勢を保っているのが能ではない。  
どんな小さなことでもかまわないのです。図書館は  
このことについてはこういうふうにします、あるい  
はしたい、さらにはこういうアイデアで将来を見す  
えておられますとね。そのプランに新陳代謝が多けれ  
ば多いほど地力がますますです。

よいことってすぐにやってきません。でも、どん  
なにしんどくても、地道な努力を積みかさねていさ  
えすれば、必ず一筋の光がさしてくるものです。

#### 夢をたぐりよせる

濱生 理想の図書館というものを想像してみると、  
電子化がなんといってもすごい。本はどこにでも持

っていけるし、好きなときに読めるし、文句なしな  
んですが、それとは別に電子媒体としても出るよう  
になれば、わざわざ図書館に来なくてもいいし、全  
部電子化されたら公開もよそから勝手につないで見  
てもらったらいいことになるかもしれないし、いつ  
かほとんどの本が電子化されるんじゃないか。むろ  
ん、著作権の問題もありますが、あとは技術的なこ  
とで、技術で解決できることは、おのずと解決する  
んじゃないでしょうか。とてもこわいような気がしま  
すが。

あと、学生のマナーをなんとかしたいなと考えて  
います。静かなほうが好きなんです、図書館は。学  
生のときはしゃべっていたような気もするのですが、  
そういう面を注意したいですね。そういう教育的配  
慮の面を押しだしてもいいんじゃないでしょうか。  
お客様としてサービスするばかりでなく、しつけを  
して叱らなくちゃいけないところは叱るという姿勢  
を忘れてはならないでしょう。

山野 そのあたりまえのことをおだやかに実行する  
のがいちばんむずかしいんです。マナーの問題も  
そうだし、貴重な資料を汚したり、破ったりしない。  
それはすべての出発点なんですけど、それがなかなか  
思うにまかせませんね。

濱生 通りかかって注意するときがあるんですけど、  
声をかけながら、自分はいったいなにさまなのだろ



うかと考えこんだりもするのです。

土師 それは自分が職員なのだから、自分がいわないといけない、他の人がしないのだったらね。

山野 注意といういいがかりをつけているような印象になりますけれども、そうじゃなくて、濱生さんの胸中をよぎっているものは、やはりよい図書館をめざしたいと念じている愛情でしょう。静かな環境でマナーをわきまえている者同士が互いに敬意を抱きあって本を読んでいる、調べ物をしている、仕事をしているのは、快適のきわみじゃないですか。人間の生活は、それほど心配りしていても、無事であるとはかぎらず、不愉快なめにあったりすることが少なくありませんからね。

土師 図書館は、心のこもったサービスをしていたら、それが先生方にも学生さんにも通じて、悪いマナーもなくなって、みんなが気持ちよく使える図書館になるのではないかとわりと楽観しています。そして、先生方とも学生さんとも、双方向にコミュニケーションを取ってすてきな関係を作っていけたらいいなとつねに考えています。

藤野 学生に電子図書館というものを教えてあげたいですね。そういうものを体験する機会を与えたい。

就職文献や法学文献や経済データの検索法について、講習会を行うことができれば役にたつでしょうね。ただ、紙と電子の違いについては、やはり紙で見るほうが便利ですし、こどもの頃から慣れているものは手放しがたいですから、そこに載っているものだけ数枚を必要とするときは、電子でもかまわないですけど、全部が必要なものは、書物が不可欠ですから、それらが両立する図書館がいいんじゃないでしょうか。

それと、読書案内をホームページで紹介しているところもあるので、そんなのができれば歓迎されるのではないのでしょうか。

山野 自分が歴史を勉強しているからいうのじゃないけれども、電子化あるいは電子図書館重視という趨勢に反対はしないのですが、しかし同時に、われわれの想像力を超える古い時代の人びとの智恵や思索の結晶である比類なき資料や書物をまえにすると、やはり肅然とした気持ちになる人間なんです。紙魚

のにおいがしみついている書物にもいつまでも生きながらえてほしいと切望する人間なんですよ。だけど、インターネットの画面を操作して、そこにあらわれる情報や情報の示し方を見て、おもしろいなあと感心してやまない人間でもあります。両方とも大事なんですね。どっちかに揺れたり、傾いたりくり返しがつづくにちがいありませんが、どちらも肝要だという視点とバランス感覚を失わないでいたいですね。

あせることなく、うぬぼれることなく、他大学や公共機関の図書館、それから私の趣味でいえば、全国にある魅力たっぷりの各種文庫、あちらこちらの古本屋さんや新刊屋さんに行けるだけ足を運んで、思考力にみちた自前の世界を自分の頭のなかのスクリーンにうつしだす工夫をこらしてみてもはどうでしょう。電子化の促進に力を注ぐだけではなくて、自分の脳裡にうつりのよいものをたくわえるよう、互いに努力してゆきたいですね。

みなさん、長時間おつかれさまでした。

阿蘇さやか (あそ さやか)  
市原亜希子 (いちばら あきこ)  
土師直美 (はぜ なおみ)  
濱生快彦 (はまお やすひこ)  
藤野雅士 (ふじの まさし)  
山野博史 (やまの ひろし)  
(五十音順)

平成10年2月26日(木)  
関西大学総合図書館会議室